

三陸の海を放射能から守る

岩手の会

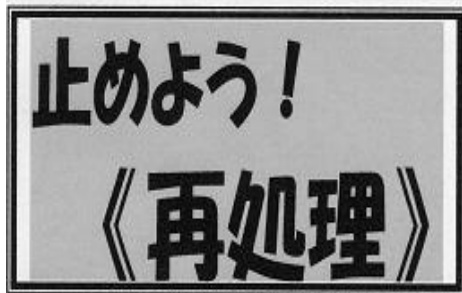
郵便振替 02240-5-102650

《再処理 / 岩手の環境》

http://homepage3.nifty.com/gatayann/env.htm

《まった再処理分庫》

http://briefcase.yahoo.co.jp/k_imag



《天恵の海》

2010(平成22)年

1月 6日

第80号

編集事務局 S.Oshida

TEL・FAX 019-623-1636

尾駁沿河口底土のヨウ素129 (尾駁港) 2年前の約12倍

(財)環境科学
技術研究所
報告書
(2008年度版)

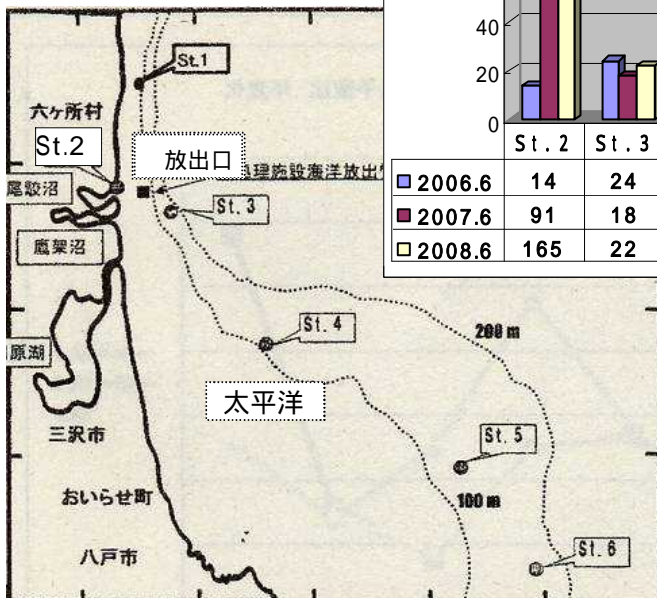
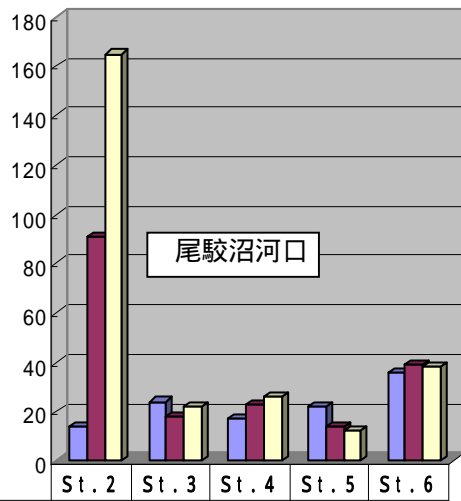


尾駁沿河口(尾駁港付近)
2009.11.23 4.00pm

(右グラフ単位) nBq/g·dry
水分を除いた泥1gあたり、
nBq・「1ナノベクレル」は
「100万分の1 ミリベクレル」

底泥採取地点

- St.2 尾駁港
- St.3 尾駁約6km沖合
- St.4 三沢市沖合約16km
- St.5 おいらせ市沖合約36km
- St.6 鮫岬沖合約33km



沿岸海域における海底堆積物試料の採取地点

『環境科学技術研究所2008年度報告書 451頁』

『尾駁(おぶち)港の海底堆積物のヨウ素129は二年前の約十二倍』。岩手の会が十一月に入手した(財)環境科学技術研究所の『平成二十年報告書』の海底堆積物測定核種には、青森県東沿岸沖合の六つの地点における測定値の報告が出ています。それによると尾駁沿河口に位置する尾駁港の海底堆積物中のヨウ素129の数値は二〇〇八年六月には165ナノベクレル/g·dryで、二年前の約一・八倍の急上昇です。再処理工場の放射性廃棄物などのような経路で尾駁沿河口を汚したのか早急に明らかにならねばなりません。

尾駁沼の海水と沼水
河口の放射能はここから来たのか
尾駁沼は海水と沼水が干潮、満潮ごとに入ります。汽水湖。河口沖合約三キロには放射性廃液の放出口があり、尾駁沼の西側には再処理工場の主排気筒が聳えています。試験開始以前より約十二倍も濃くなったこのヨウ素129は一体どこから

もたらされたのでしょうか。
日本原燃の発表によると、アクティブ試験(〇六年四月〜〇九年三月)で放出されたヨウ素129の合計は海五億五千万ベクレル、空七億四千万ベクレル。ヨウ素129の数値上昇の原因としては、主排気筒からの廃ガスが下降し尾駁沼の水に溶けることや、三キロ沖で放出された廃液が沿岸に寄せられることが考えられます。日本原燃や青森県当局は早急に調査し、安全対策を講ずるべきです。

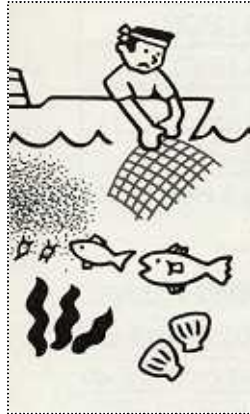
つき崩される 「0.022」ミリシーベルトの虚構

環境技術研究所
「年次報告書」

日本原燃
「事業許可申請書」

08年実測値
尾駮沼の
ヨウ素 129 濃縮
藻類
4700倍
カキ貝 197倍
エビ 297倍
ハゼ 114倍

原燃予想値
ヨウ素 濃縮
海藻類
2000倍
貝 60倍
エビ 30倍
魚 30倍



岩手の会では、青森県や環境科学技術研究所の「年次報告書」を分析して、尾駮沼の生物の放射能汚染が予測以上に急速に進行しており、このまま工場が操業に入れば、汚染が進み、深刻な状況になることを明らかにしました。本紙前号に記載しましたように尾駮沼のプランクトンや藻類のヨウ素129は三年前の数十倍です。

原燃はヨウ素の生物濃縮を過小評価し計算 数倍高い実際値、計算のやり直しを

- * 原燃予想値 日本原燃「再処理工場事業申請書」(1991提出)による。
- * 尾駮沼の実際の数値 (財)環境科学技術研究所「2008年度報告書」による(本紙第79号)
- * 尾駮沼水ヨウ素129の最大値 同上研究所報告書「2008年度報告書」P434
「湖沼ヨウ素129 平均値・最大で2.9nBq/cm³」とある。(水1g=1cm³)

一九九一年に日本原燃が経産省に提出した「再処理工場事業申請書」では、生物濃縮について様々なケースを想定して試算しています。そして、住民が被曝する放射線は「年間〇・〇二

私達から見るとこの数値自体が恐ろしい倍数であるのですが、それでもかなり低めであったことが今回の環境科学技術研究所の調査によって証明されました。尾駮沼の実測値は予測計数の数倍

一九九一年に日本原燃が経産省に提出した「再処理工場事業申請書」の中で、「ヨウ素の濃縮係数」について、魚類で三〇倍、海藻類で二〇〇〇倍、貝類で六〇倍などと記しています。どこから得られた数値なのでしょうが、

青森県への要請行動



市民サミット世話人会
反核燃秋の共同行動実行

尾駮沼の汚染をどうするのかが

委員会などの市民団体代表は十一月二四日、青森県庁に出向き青森県に対して、尾駮沼の生物の放射能蓄積やクリプトンの雲下降などの資料を提出し、見解を質しました。対応したのはエネルギー総合対策課の課長さんら五人でしたが、市民らは県当局が県民の命と暮らしを守る立場から早急な対策を取るよう強く訴えました。

「濃縮係数」がいかに過小に設定されていたかが明らかになった以上、経産省や原燃は年間被ばく量を実際の測定値にもとづく濃縮係数を用いて再計算するべきではないでしょうか。

「二ミリシーベルト」で安全は十分に確保される」と結論づけています。原燃は、「この説明を伝家の宝刀のように繰り返してきました。私達はこの数値について、再処理推進側に都合の良い数字だけを並べた試算と批判してきました。事業申請書」

「29の最大値」に対して「藻類」が四七〇〇倍に、貝で一七七倍、エビで二九七倍、ハゼで一四四倍に濃縮されてきました。海水と汽水湖水との違いがあるとしても原燃や国が計算に用いた濃縮係数を大きく上まわっています。国や原燃の説明責任

「再処理稼働凍結」「高レベル廃液の絶対的安全対策」を求める「全国署名」は二月末日で七万九千三百七筆を数えました。署名運動の輪は大きく広がりを見せており、北海道・青森・岩手・宮城・東京・大阪・宮崎・長崎などの消費者運動や環境運動関係者、漁業者、サーファーなど多彩な人々から署名簿が到着しています。「市民サミット」署名でキャン」の呼びかけが功を奏しています。

署名七万九千三百七筆 一月中旬に政府に提出